

11月号 表紙の顔



小林あゆみ

AYUMI KOBAYASHI

長びくスランプも 「明けない夜はない」

アウターは、スポンサーでもあるNEW ERAの最新スタジアムジャケット。スポーティーな秋の装いで今月の表紙を飾ってくれた小林あゆみプロ。登録会員数400人超のファンクラブを有し、『P★LEAGUE』のメンバーにも名を連ねる人気プロだが、近年は成績が低迷し、関係者をヤキモキさせている――。

PHOTO／福地和男



▲流麗な投球フォームのレフティ。復活のときが待たれる

飾っている(オンエアは六甲の後日)。

しかし、コンスタントに好成績を挙げていたのは14年まで。以後は賞金獲得もままならない不振のシーズンが今日に至るまで続いている。

「今思うと、勝っていたころは余計なことを何も考えずに無心で投げていた気がします」とあゆみプロ。さらなるスキルアップを図るべく、ありとあらゆる情報を収集して試行錯誤を繰り返すうちに「迷いすぎてワケが分からなくなってしまった」と苦笑する。

だがそれは、多くの一流選手が一度は必ずぶち当たる壁。二流の選手はハナから考えないし、悩まない。彼女の場合、勢いや運だけでは達成できない新人時代の3勝が、一流のポテンシャルの証だ。

課題は技術面より「以前は試

合に行って投げるのが楽しかったのに、今は不安のほうが先に立って楽しむ余裕がない」「本来はマイペースな性格で、周囲を気にして行動するタイプではないのに、今は他人の目が気になってしまう」というところまで、長いスランプの間に喪失したメンタル面の自信回復と強化だろう。

「ボウリングとはカラダの使い方が違う別のスポーツを経験してみるのもいいかもしれないですね。ゴルフをやってみようかな?」

それはいい。何よりも、ネガティブ思考にしっかりフタをして前を向くことだ。

最後に、シェイクスピア『マクベス』の名台詞をあゆみプロに贈ろう。

「明けない夜はない」――。
(取材協力:トミコシ高島平ボウル/共同エディット)

小林プロと一緒に投げよう!
近日開催のチャレンジマッチ

●11月16日
愛知・名古屋グランドボウル

●11月26日
ラウンドワンLIVEチャレンジ
東京・ラウンドワン南砂店(配信店舗)

●12月21日
東京・東大和グランドボウル



こばやし・あゆみ/1989年11月19日、栃木県宇都宮市生まれ。159センチ、左投げ。血液型A。2011年プロ入り(44期/ライセンスNo.478)。トミコシ高島平ボウル所属(副支配人)。公式戦優勝3回(12年六甲クイーンズ、女子新人戦、13年宮崎プロアマオープン)。P★LEAGUE優勝2回。

ボウリングを始めたのは小学生のとき。小林家にとって何よりのコミュニケーションツールだったのがボウリングで、中学時代には近所のセンターのリーグに家族全員で参加して「週3ペースで」投げていたという。

そのかわり、JBCに入会してジュニアの競技会にも参加。高2、高3時には2006年兵庫、07年秋田の両国体に出場し、1歳違いの妹・よしみとのペアでダブルス戦2大会連続準優勝を果たしている。

高校卒業後は地元のセンターでアルバイトをしながらプロを目指し、よしみとともに10年のプロテストを初受験。1次テ

ストをトップ通過するも「4センター中2センターが苦手なレーンだった」2次テストで大きくスコアを崩し、まさかの不合格。「姉は合格確実だが、妹はどうだろう?」という周囲の予想を覆してみごと合格を勝ちとったよしみに先を越されてしまう。

だが、その悔しさをバネに翌11年のプロテストを突破すると、デビューから2年の間に3勝を挙げる大活躍で溜飲を下げた。ちなみに、岸田有加プロ(43期)を1ピン差退けて初Vに輝いた12年六甲クイーンズの直前には、プロ入りして上京すると同時に仲間入りを果たした『P★LEAGUE』でも初優勝を



コカ・コーラカップ 2019千葉オープン

10月18～20日/ユウカリ・ボウル



久保田彩花が 初代女王に

昨年までは男子トーナメントとして行われてきた千葉オープンは、今年から男女隔年開催となったが、その第1回の女子大会は、久保田彩花が初代女王に輝き、2017年の宮崎プロアマ以来の3勝目を挙げた。(主催:千葉日報社/千葉県ボウリング場協会 特別協賛:コカ・コーラボトラーズジャパン(株))

「レーンがすごく難しく、自分も優勝できると思っていなかった。でも結果がよいのは打ち合いより我慢の展開と

難コンディションをただ一人アベ200アップの佐藤まさみを筆頭に、板倉奈智美、姫路麗、久保田彩花、丹羽由香梨、谷川章子の6名が決勝シュートアウトに進んだ。

シュートアウト1stマッチ

4位から6位通過の3名による1stマッチは、前半リードの丹羽が7フレをスプリットでブレーキがかかると、逆に久保田が7フレからオールウェーを決めて勝ち上がった。

シュートアウト2ndマッチ

2、3位通過者に久保田を加えた2ndマッチは、20勝目がかかる姫路が4フレからダブル、7フレからターキーなどで執念を見せたが、1フレから6連発の久保田の勢いを止められなかった。

優勝決定戦

変化してきたレーンへの対処に苦戦し、ともに我慢の展開と

なった。4フレ②④⑥をカバーミスで佐藤が1マーク半ビハインドのまま迎えた10フレ、久保田は1投目の渾身のストライクで優勝を決め、約2年半ぶりの通算3勝目を挙げた。

久保田のコメント

2位で迎えた準決勝の最終Gで150をやってしまった、1G余計に投げなければならなかった。決勝は同じレーンだったので、ボールもラインも変えて投げたのがうまくはまった。だからあの150があったから優勝があったのかなと思う。今年は準決勝には残るけど、10位

前後が多くてもややもやしていたのでうれしい。(優勝ボール:コロンビア300カオス・ブラック)



「トップシードを生かせなかった佐藤だが、今シーズン好調が続いている」



▲左から優勝・久保田、2位・佐藤、3位・姫路、4位・板倉、5位・丹羽、6位・谷川、ベストアマ・松丸澄子選手